

Journal of the International College
for Postgraduate Buddhist Studies
Vol. XIX, 2015

国際仏教学大学院大学研究紀要
第19号（平成27年）

智顛撰 『維摩經文疏』 訳注（三）

藤
井
教
公

智顓撰『維摩經文疏』訳注(三)

藤井教公

はじめに

筆者は智顓撰『維摩經文疏』の一部分の訳注を、本誌第十七号(平成二十五年三月刊)と第十八号に、それぞれ智顓撰『維摩經文疏』訳注(一)、同訳注(二)として発表した。本稿は、先に刊行した訳注(一)(二)に続くものである。体裁は前稿を踏襲して、『新纂大日本統藏經』第十八卷所収の『維摩經文疏』のテキスト原文を数行のまとまりごとに区切って示し、その部分の訓読を掲げ、その後、訳注を付した。本稿はテキストの四六九頁中段四行目から四七一頁下段十一行目までを掲載する。この続きは順次発表していきたい。過誤の多いことを懼れるが、大方の批正を請う次第である。凡例は次の通りである。テキストの解題は智顓撰『維摩經文疏』訳注(一)を参照されたい。

凡例

- 一、テキスト原文には一、二点、レ点などの返り点が施されているが、読点や句点はない。今、返り点を省き、意味に従って句点を施した。
- 一、テキストの文中には頁と段の変わり目にカッコで『新纂大日本統藏經』卷十八の頁と段を記入して、その始まりを示した。
- 一、字体はテキスト部分とその引用、書き下し文、『大正藏經』所収の經典論書の引用部分などは、原則として正字を用いた。それ以外は略字を用いた。
- 一、テキスト文中のゴチック字体部分は『維摩經』の經文部分である。
- 一、テキスト文中の〈 〉内の部分は割り注部分を示す。
- 一、書き下し文中のヤマカッコは筆者による補いで、『略疏』との対照によるテキスト欄外注記に従って字を補ったものである。
- 一、守篤本純の『維摩詰經疏籤録』の場所の指示は、巻数と頁数を記し、頁数の次に表の場合は「オ」、裏の場合は「ウ」と記した。
- 一、註に記した典拠の引用文で、引用部分が判然としにくい場合には該当部分に傍線を付した。

【テキスト】『新纂大日本統藏經』卷十八、499b4-17(以下頁、段、行のみを記す)

第七約觀心明四種者^①。心性本來畢竟空寂。而衆生多顛倒。少不顛倒。無明因緣而起善惡。即因緣所生法也。即

空即假即中道。(中)^②道是因緣善惡之境。即是凡聖同居之土。所以者何。觀此善惡。所觀惡心即是穢土。所觀善心即是淨土。若了因緣之法虛假。或析法入空。體法入空。觀第一義。第一義境即是有餘土也。知空非空。不以空爲證。亦知中道非因果。而因而果。皆無定性。若了因果無障者。即是果報無障礙土也。雖復空假方便入出之殊。而無明心之源即佛性。若無明性即是明。是爲常寂光土也。故此經云。隨其心淨即佛土淨。大集經云。欲淨佛國當淨汝心也。華嚴經云。無量諸世界悉從心緣起一切諸法皆入一毛道。

(1) テキストの欄外注記には「種下疑脫國字」とあるが、今は採らない。『維摩經略疏』(以下、『略疏』)では、「七約觀心明四國者」(『大正藏』卷三八、566c)とある。

(2) 次下の「道」の字について、テキストの欄外注記に「道上疑脫中字」とあり、『略疏』にも「即所生法即空即假即中。中是因緣善惡之境」(同上)とある。意味上からも「中」の字があつた方が通じるので、今、これを補う。

(3) テキストの欄外注記に「若下疑脫知字」とあり、『略疏』では「若知無明性即是明」(同上)とある。しかし、「知」がなくとも文意は通じるので、今は採らない。

【書き下し】

第七に觀心に約して四種^①を明かさば、心性は本來畢竟空寂にして、衆生顛倒多く、不顛倒少なし。無明の因縁にして善惡起^①これば、即ち因縁所生法なり。即空即假即中道なり。(中)道は是れ因縁なり。善惡の境は即ち是れ凡聖同居の土なり。所以は何ん。此の善惡を觀ずれば、所觀の惡心は即ち是れ穢土なり。所觀の善心は即ち是れ淨土なればなり。若し因縁の法は虛假なりと了し、或は法を析して空に入り、法を體して空に入り、第一義を觀ぜば、第一義の境は即ち是れ有餘土なり。空と非空を知り、空を以て證と爲さず、亦た中道は非因・非果にし

て因・果なり、皆な定性無しと知り、若し因果に障なしと了さば、即ち是れ果報無障礙土なり。復た空假の方便は出入の殊り(あり)と雖も、而も無明心の源は即ち佛性なり。若し無明性は即ち是れ明なれば、是れ常寂光土と爲すなり。故に此の經に云く、「其の心淨きに随つて即ち佛土淨し」と。『大集經』に云く、「佛國を淨めんと欲さば、當に汝の心を淨むべきなり」と。『華嚴經』に云く、「無量の諸の世界、悉く心従り縁起す。一切諸法、皆、一毛道に入る」と。

(1) 四種の仏国土のこと。

(2) 或は法を析して空に入り、法を體して空に入り「空」に入る二種の觀法。析空觀と體空觀のこと。前者は小乗教、後者は大乘教における空觀の方法とされる。

(3) 故に此の經に云く『維摩經』仏国品に「隨其心淨則佛土淨」(『大正藏』卷十四、538c)とある。

(4) 『大集經』に云く『維摩詰經疏籤錄』(以下『籤錄』)(卷二、十二ウ)は、經の第十一卷海慧菩薩品「佛言。比丘汝名淨聲當淨自界。自界既淨則名比丘則名出家。爾時比丘問佛說已。心樂寂靜作是思惟。界者即眼觀。眼空者即是淨界。夫淨界者即是佛土。」(『大正藏』卷十二、69c)の取意とする。

(5) 『華嚴經』に云く 旧訳『六十華嚴』如來性起品に「無量諸境界 悉從心緣起 一切諸法界 皆入一毛道」(『大正藏』卷八、626a)とある。

【テキスト】 469b17-c11

第八用佛國義釋此經者。即爲三意。一通序分。二通正說。三釋流通。一通序分者。如來合蓋現土。此瑞正是表說佛國。故寶積述歎云。今奉世尊此微蓋。於中現我三千界。寶積深知合蓋欲說淨土。故稱歎竟即請問佛國因果。

叙述現瑞正意。表欲說佛國也。

二 明通正說者。即有三分經文。一室外二室內三出室。一通室外者(有)三品半文。寶積請說佛國因果。如來答佛國因果。故佛足指案地。現「469c」於淨土。令諸衆生得大乘益。復土如故。求聲聞人得小乘益也。若不解佛國依報之義。豈識此一品經文之玄旨也。次通方便品者。爲國王長者說析體兩種觀門。勸求佛果。正因若成依因則具。諸國王長者界內結業未斷。得生同居淨國。界內結業若斷。則生有餘土。若成佛時。則二種衆生。來生其國。次通弟子品。呵十大弟子五百羅漢。意在斷界外緣集。若至法華斷別惑。即生果報國。後成佛時三種衆生來生其國。次通菩薩品。呵四大菩薩及八千菩薩。若斷無明法界煩惱。即生常寂光土。後成究竟妙覺佛時。一種衆生來生其國也。

(1) テキストの欄外注記には「三上疑脱有字」とあり、『略疏』にも「一通室外者有三品半文」(『大正藏』卷三十八、506c)とあるので、今、補う。

【書き下し】

第八に佛國義を用いて此の經を釋すとは、即ち三意と爲す。一には序分を通ず。二には正說を通ず。三に流通を釋す。

① 一に序分を通ずとは、如來、蓋を合して土を現す。此の瑞、正しく是れ佛國を説き表す。故に寶積述歎して云く、^②「今、世尊に此の微蓋を奉る。中に於いて我が三千界を現す」と。寶積は深く蓋を合して淨土を説かんと欲するを知る故に、稱歎し竟りて即ち佛國の因果を請問す。瑞を現するの正意を叙述するは、佛國を説かんと欲するを表すなり。

二に正說を通ずるを明かすとは、即ち三分の經文有り。一に室外、二に室内、三に室を出ざるなり。

一に室外を通ずとは、三品半の文(有り)。寶積、佛國の因果を説くを請う。如來、佛國の因果を答う。故に佛は足指もて地を案じ、淨土を現じ、諸の衆生をして大乘の益を得さしめ、土を復すること故の如く、聲聞を求むる人に小乗の益を得さしむるなり。若し佛國の依報の義を解せざれば、豈に此の一品の經文の玄旨を識らんや。次に方便品を通ずとは、國王・長者の爲に析・體兩種の觀門を説き、佛果を求むるを勸む。

正因若し成ぜば、依因則ち具す。諸國の王・長者の界内の結業は未だ斷ぜざるも、同居淨國に生ずることを得。界内の結業、若し斷ぜば、則ち有餘土に生ず。若し成佛の時は則ち二種の衆生、其の國に來生す。

次に弟子品を通ず。十大弟子・五百羅漢を呵す。意は界外の緣集を斷ずるに在り。若し法華に至りて別惑を斷ずれば、即ち果報國に生じ、後に成佛の時、三種の衆生、其の國に來生す。

次に菩薩品を通ず。四大菩薩及び八千の菩薩を呵す。若し、無明法界煩惱を斷ぜば、即ち常寂光土に生じ、後に究竟妙覺の佛を成ずる時、一種の衆生、其國に生ずるなり。

(1) 如來蓋を合して土を現ず。經の仏國品で、仏が献上された蓋を一つに合成し、また穢土を淨めて仏國土を現出したこと。

(2) 寶積述歎して云く、『維摩經』仏國品に「今奉世尊此微蓋 於中現我三千界」とある(『大正藏』卷十四、537c)。

(3) 地を案じ「案」は(上から下へ)押さえる、の意。仏が足の指で地面を押さえること。經の仏國品には「於是佛以足指按地」(同上、538c)とある。

(4) 二種の衆生 凡夫と聖者の二種。

(5) 界外の緣集 三界の外の緣集成成のこと。不思議變易生死を指す。なお、青木隆氏によれば(「青木隆『維摩經文疏』における智顛の四土説について」早稲田大学文学研究科『文学研究科紀要』別冊第十一集哲学・史学編 p.52、1

九八五年一月)、「諸縁積集」のこととし、また吉津宜英氏によれば、「縁起集成」の略とする(吉津宜英「豊遠の仏性縁起説」『駒澤大学佛教学部研究紀要』第三十三号、一七三頁、一九七五年三月)。青木氏自身は「生死を受ける因となるもの」と解している(青木同前論文同頁)。ここでは不思議変易生死をもたらす縁起集成をいう。『訳注』(二)二十一頁注(9)を参照。

(6) 三種の衆生。声聞・縁覚の二乘人と菩薩の三種。四教の範疇でいえば、三藏教の声聞縁覚、通教の三乗、別教の十行の菩薩、円教の十信の後心の菩薩をいう。

(7) 四大菩薩。弥勒菩薩、光嚴童子、持世菩薩、長者子善徳の四人の菩薩をいう。

(8) 無明法界煩惱。無明世界の煩惱。無明による迷いの世界の煩惱の意。ここでは「法界」は世界ほどの意味か。

(9) 一種の衆生。円教の菩薩を指す。

【テキスト】 469c11-470a9

二通室内六品經文者。文殊問病。入毗耶離城。淨名即現室空云。以十方諸佛國土空故現室空也。此豈非正表顯佛國義。符成如來說佛國也。次通不思議品。現須彌入芥等不思議事。皆是佛國依報自在無礙也。次通觀衆生品。天女住室十有二年。即是同淨名。在常寂國。正是助顯佛國。故云十方諸佛淨土。常現此室。次通佛道品者。行於非道。通達佛道。即是於不淨國。顯現一切諸淨國也。故淨名說偈云。雖知諸佛國及以衆生空。而常修淨土。教化諸群生。次通入不二法門品。諸菩薩各說入不二法門者。欲破前二土無明。入果報土。住常寂土也。次香積品。此室現衆香之淨國。對娑婆穢土。即是證成室內五品。符成佛說菩薩淨穢兩國。

三通出室 [470a] 兩品經文者。菩薩行品。淨名掌擎大衆。還菴羅園。佛對阿難廣說種種佛土。復宗明義。若不精解。此品經文。何由可別。次通阿閼佛品。即是室外現土。證成如來說種種土。其義分明。聞經得道。倍於前也。

三明用佛國釋流通兩品者。法供養品。天帝發誓傳經。如來印可。正爲流通不思議解脫之體。佛國因果之宗也。囑累品。即是如來付囑彌勒及阿難等。流通不思議解脫法門。及上來所明佛國因果。令使不絕也品。

【書さ下し】

二に室内の六品の經文を通ずとは、文殊、病を問うて毗耶離城に入る。淨名は即ち室の空を現じて云く、「十方諸佛の國土は空なるを以ての故に、室の空を現ずるなり」と。此れ豈に正しく佛國義を顯するを表し、如來が佛國を説くことに符成するに非ざるや。

次に不思議品を通ず。須彌が芥に入る等の不思議の事を現ずるは、皆是れ佛國の依報、自在無礙なればなり。

次に觀衆生品を通ず。天女室に住すること十有二年、即ち是れ淨名と同じく常寂國に在り。正しく是れ佛國を助顯す。故に十方諸佛の淨土、常に此の室に現すと云う。

次に佛道品を通ずとは、非道を行じて佛道に通達するは、即ち是れ不淨國に一切諸淨國を顯現するなり。故に淨名は偈を説いて云く、「諸佛國と及び衆生とは空なりと知ると雖も、而も常に淨土を修して諸の群生を教化す」と。

次に入不二法門品を通ず。諸の菩薩、各入不二法門を説くとは、前の二土の無明を破し、果報土に入つて、常寂土に住せんと欲するなり。

次に香積品なり。此の室、衆香の淨國を現じ、娑婆の穢土に對せば、即ち是れ室内の五品を證成し、佛が菩薩の淨穢兩國を説くに符成す。

三に出室の兩品の經文を通ずとは、菩薩行品は淨名、掌もて大衆を擎して菴羅園へ還る。佛、阿難に對して廣く種種の佛土を説く。

宗に復して義を明かすに、若し精しく解せずんば、此の品の經文、何に由りて別つべきや。

次に通阿闍佛品を通ず。即ち是れ室外に土を現じて、如來が種種の土を説くを證成す。其の義、分明なり。經を聞いて得道すること前に倍するなり。

三に佛國を用いて流通の兩品を釋するを明かすとは、法供養品に天帝誓を發し、經を傳う。¹¹ 如來印可したもう。正しく不思議解脱の體、佛國の因果の宗を流通すると爲すなり。囑累品は即ち是れ如來、彌勒及び阿難等に付囑して不思議解脱法門及び上來明かす所の佛國の因果を流通し、絶えざらしむるなり。

(1) 毗耶離城 ヲアイシャーリー (Vaiśālī) の音写。ヴァツジ国の城都。

(2) 淨名は即ち……云く 問疾品に「維摩詰言。諸佛國 土亦復皆空。」(『大正藏』卷十四、514c) とある。

(3) 符成 「符」は割り符。割り符を合わせるように、びつたりと当てはまること。

(4) 須彌が芥に入……現ずる 不思議品に「唯應度者乃見須彌入芥子中。是名住不思議解脱法門」(同前、516b) とある。

(5) 天女室に住すること十有二年 觀衆生品に「舍利弗。吾止此室十有二年。初不聞說聲聞辟支佛法。但聞菩薩大慈大悲 不可思議諸佛之法。」(同前、520b) とある。

(6) 十方諸佛の……に現ず 觀衆生品に「此室一切諸天嚴飾宮殿。諸佛淨土皆於中現」(同前、同頁同段) とある。

(7) 偈を説いて云く 「雖知諸佛國 及與衆生空 而常修淨土 教化於群生」(同前、520a) とある。

(8) 此の室、衆香の淨國を現じ 香積品に「時維摩詰即入三昧。以神通力示諸大衆。上方界分過四十二恒河沙佛土。有國名衆香。佛號香積。今現在其國香氣。比於十方諸佛世界。人天之香最爲第一」(同前、523a) とある。

(9) 證成 覺りが完成するの意があるが、ここでは間違ひなく成立するほどの意。

(10) 掌もて大衆を撃して菴羅園へ還る。「撃」は捧げるの意。掌で持ち上げるの意味。大衆を掌で持ち上げて菴羅園へ還ったこと。經の香積仏品に「維摩詰即以神力。持諸大衆并師子座。置於右掌。往詣佛所到已著地」(『大正藏』卷十四、553b) とある。

(11) 三に佛國を用いて……明かすとは 仏國義を用いて經を解釈するについて、序分、正説分、流通分の三段の解釈があるうち、第三の流通分の解釈をいう。

(12) 法供養品に天帝……經を傳う 經に「爾時釋提桓因於大衆中白佛言。世尊。我 雖從佛及文殊師利聞百千經。未曾聞此不可思議自在神通決定實相經典。(中略)世尊。若有受持讀誦如説修行者。我當與諸眷屬供養給事。所在聚落城邑山林曠野有是經處。我亦與諸眷屬。聽受法故共到其所。其未信者當令生信。其已信者當爲作護。佛言。善哉善哉。天帝。如汝所説。」(『大正藏』卷十四、556a) とある。

【テキスト】 470a9-b14

第四釋品者。(此即卷之首總章第四重) 品以品類爲義。經文義類同者。晚人聚爲一段標稱品。但此品題應云序品。而言佛國品者。從正説以當名也。

問。此品既有序正。何得但用佛國正説以標品目也。

答。此非問也。若用序當品。復應問何不用正當品。今解餘經不無其例。如摩訶般若初半品是序。從告舍利弗後半品是正説。而用序標品復應何妨。若不許此經序分受正説名者。今亦不許大品初半品是序。次半品是正而用序標品也。

問。若爾定應用序標題也。

答。金光明經由藉序與正説同品亦應爲妨。此既晚人安品厝意不同。非佛所製。亦非阿難。不足定執也。此經雖

不標序品爲初。而序義宛然。事須懸釋也。序義衆多。今略用三意通釋。一略釋序義。二明通別。三約觀心。一略釋序義者。略用三義解釋也。一序以次序爲義。二序以由藉爲義。三序以序述爲義。一序以次序爲義〔470b〕者。夫著文初次名之爲序。今如是六義是佛經教之首。故名爲序也。二序以由藉爲義者。大聖說教必須由藉。是以現瑞表發。生物喜心。故云道從歡喜生也。以此爲由故得說教也。三序以序述爲義者。物情既生欣慕。而聖意難量。時衆歸心靡知所趣。所以須假高位弟子或化佛菩薩預先稱述。衆疑既息。歸宗有在。方可致教。故云序述也。

今明此經經初六義。即是次序。合蓋現土。即是由藉之序。寶積七言述歎。即是序述之序。問。諸經悉具三序不答。此義不定。有具不具。或但二義。或但一義。皆爲序分也。

問。諸序所訓字各不同。何得俱用此次序之序。通會衆義。

答。若依書字⁽¹⁾有此分別。經之意竝會此三。義在既備。共用次序之字。亦應無妨。經明四依。依義不依語也。

(1) 欄外注記に「書字略疏作字書」とある。略疏では、「答字書雖爾經意含三共」(『大正藏』卷三十八、567b)のように「字書」とするが、今は採らない。

【書き下し】

第四に品を釋すとは(此れ即ち卷の首、總章の第四重)品は品類を以て義と爲す。經文の義、類して同じとは、晚人聚まり一段と爲して標するに品と稱す。但だ此の品の題、應に序品と云うべし。而して佛國品と言うは、正説に從つて以て當に名づくるべきなり。

問う。此の品既に序・正有り。何ぞ但だ佛國の正説のみを用て以て品目を標するを得んや。

答う。此れ問いに非ざるなり。若し序を用て品に當つれば、復た應に問うべし。何ぞ正を用て品に當てざるや

と。今、餘經を解すに其の例無きにしもあらず。摩訶般若の如き、初めの半品は是れ序、「告舍利弗」従り後の半品は是れ正説にして、序を用て品を標す^②。復た應に何の妨なるべし。若し此の經の序分、正説の名を受くること許されずんば、今、亦た大品の初の半品は是れ序、次の半品は是れ正にして、序を用て品を標するを許さざるなり。

問う。若し爾らば、定んで應に序を用いて題を標すべきなるや。

答う。金光明經の由藉の序は正説と品を同じくす^③。亦た應に妨げと爲すべきや。此れ既に晚人が品を安んじ意を厝(一措)くこと不同にして、佛の製する所に非ず。亦た阿難に非ず。定んで執するに足らざるなり。此の經は序品を標して初と爲すにあらずと雖も、而して序の義は宛然として、事は須らく懸釋す^④べきなり。

序の義衆多なり。今、略して三意を用て通釋せん。一には序の義を略釋す。二には通別を明かす。三には觀心に約す。

一に序の義を略釋すとは、略して三義を用て解釋するなり。一に序は次序を以て義と爲す。二に序は由藉を以て義と爲す。三に序は序述を以て義と爲す。一に序は次序を以て義と爲すとは、夫れ文の初次を著すをこれを名づけて序と爲す。今、是くの如き六義は、是れ佛の經教の首め^⑤なるが故に名けて序と爲すなり。二に序は由藉を以て義と爲すとは、大聖の説教は必ず由藉を須う。是を以て瑞を現すこと表發して、物の喜心を生ずるが故に「道、歡喜従り生ず」と云うなり^⑥。此を以て由と爲すが故に説教することを得るなり。三に序は序述を以て義と爲すとは、物の情、既に欣慕を生ずるも、しかして聖意量り難し。時の衆、歸心の趣く所を知ることなし。所以に高位の弟子、或は化佛菩薩の預先^⑦の稱述を假るを須う。衆の疑、既に息みて、歸宗在ること有り。方に教を致すべきが故に序述と云うなり。

今、明さく、此の經の經初の六義は即ち是れ次序なり。合蓋現土は即ち是れ由藉の序、宝積の七言の述歎は即

ちられ序述の序なり。

問う。諸経は悉く三序の義を具すやいなや。答う。此の義、定まらず。具、不具有り。或いは但だ二義、或いは但だ一義なるのみ。皆序分と爲すなり。

問う。諸の序の訓ずる所の字、各不同なり。何ぞ俱に此の次序の序を用いて通じて衆義を会すことを得んや。答う。若し書字に依らば、此の分別有り。経の意並びに此の三を会して、義在りて既に備わる。共に次序の序を用いること亦た応に妨げ無かるべし。経に四依⁸⁾を明かす。義に依り、語に依らざるなり。

(1) 第四に品を釋すとは、以下の割り注にあるように、『維摩經文疏』科文総章に I 経の度ること尽くならざるを明かす、II 略して文を分かつ、III 仏国義を弁ず、IV 品を釈す、V 正しく経文に入る、の五章があるうちの「IV 品を釈す」に相当する。なお、『訳注』(一)の六頁の科文参照。

(2) 摩訶般若の如き……序を用て品を標す『大品般若』の以下のような文は本来、正宗分に属するものであるが、しかし序品中にある。「佛知衆會已集。佛告舍利弗。菩薩摩訶薩欲以一切種智知一切法。當習行般若波羅蜜。」(『大正藏』卷八、218c)。

(3) 金光明經の由藉……品を同じくす「由藉」は、いわれ、縁由の意。『訳注』(一)十八頁注(4)参照。吉藏『仁王般若經疏』にも「言序品第一者發起由藉名之爲序」(『大正藏』卷三十三、315a)と云う。ここでは『金光明經』の縁由の序が正説分と同じ品の中にあることをいう。曇無讖訳『金光明經』序品の次の寿量品第二の文、「爾時四佛。於大衆中略以偈喻說釋迦如來所得壽量」(『大正藏』卷十六、336a)から正宗分に相当し、それ以前の寿量品中の文は序の内容となっている。

(4) 懸釋 (両方に)懸けて解釈すること。

智顛撰『維摩經文疏』訳注(三)(藤井)

(5) 六義 經典の冒頭の文を序とするが、それは以下のような定型句になっていて、それぞれの句、「如是」を信成就、「我聞」を聞成就、「一時」を時成就、「佛」を主成就、「住某所」を処成就、「与衆俱」を衆成就とする。六成就ともいう。

(6) 「道、歡喜従り生ず」と云う『籤録』(巻一、十四才)の指示によれば、『大宝積經』卷十一の「以是喜悅發大道意」(『大正藏』卷十一、61c)という。

(7) 化佛菩薩の預先の稱述 化仏菩薩は『籤録』(同前卷、同頁)によれば、『金光明經』寿量品で東西南北の四仏が応現し、先に釈迦牟尼仏の寿量無量を称嘆したことをいうとする。「預先」は、前もって、予め、の意。

(8) 四依 依義不依語(義に依りて語に依らざれ)、依智不依識(智に依りて識に依らざれ)、依了義經不依不了義經(了義經に依りて不了義經に依らざれ)、依法不依人(法に依りて人に依らざれ)の四種の依るべきものと依らざるべきもの。『大般涅槃經』の四依品では「如佛所說是諸比丘當依四法。何等爲四。依法不依人。依義不依語。依智不依識。依了義經不依不了義經」(『大正藏』卷十二、62a)とあり、曇無讖訳『大方等大集經』にも「菩薩摩訶薩有四依法。亦不可盡。何等爲四。依義不依語。依智不依識。依了義經不依不了義經。依法不依人」(『大正藏』卷十三、205a)とある。

【テキスト】 470b14-c17

二明通別者。還束前三序。以爲通別兩序。初如是六義是通序。現瑞序述二序合爲別序。所言通者。衆經之初。通以六義爲首名通序。次別序者。衆(經)^①之初。現瑞不同。序述各異。有所表發異故。故云別序也。

問。何故有此通別兩序不同。

答。具如前解。一切衆經名題。必具通別。今因別名。則有(別)^②序。有別言教也。因通名則有通序。通皆是佛之所說也。乃至約前明行通別理通別。因此故得有通別兩序義。

問。若以通別兩序。從別通兩名出者。立名則前別後通。爲序何得前通後別耶。

答。立名之便。應前別後通。爲序之便。應前通後別。〔470c〕復次一途明義。亦前別後通。所以者何。如現瑞由藉。是在說經之前。如是等六義。乃是如來將入涅槃方說此語。故知在後。經前序正爲發起現在弟子信心。經後序爲令未來弟子生信。

問。若爾佛在世經。前未有序。不名經也。

答。別序前雖未說六義。佛說法時以自具有。得名經也。

三、明約觀心對通別兩序者。心即是通。觀即是別。因此心觀成就一切佛法。故觀心即入道之初門由藉也。

問。若爾以觀心是入道筌。爲通別兩序義者。豈不顛倒耶。

答。立名之便故言觀心。修行之便即是心觀。此類前事義。理釋然。^⑤

問。前者玄義處處明觀心。已恐不可入文復爾。將不壞亂經教耶。

答。說經教者。本爲教人入道。懷道之賢。觸處觀行。豈有尋求聖典。而不觀行者乎。但巧說得宜。非止無損文義。兼得觀慧分別。豈致壞亂之咎也。

維摩詰經文疏卷第一

(1) 欄外注記に「衆下疑脫經字」とある。『略疏』に「名通序。衆經之初現瑞不同序述各異」(『大正藏』卷三十八、567d)とあり、意味上からも今、「經」の一字を補う。

(2) 欄外注記に「序上疑脫別字」とある。『略疏』に「今因別名則有別序。有別言教」(同前、同頁)とあり、意味上からも「別」の一字を補う。

(3) 欄外注記に「行明疑倒當作明行」とある。『略疏』に「若因通名則有通序。行理通別因此而有兩序」(同前、同頁)とあつて、行と理の通別をいうので、テキストのこの箇所は「行通別」「理通別」の二種を述べていると考えられる。それゆえ、今、語順を「行明」から「明行」に改める。

(4) 「在」の字は、もとのテキストでは「昔」の字。欄外注記に「昔疑誤當作在」とあり、意味上からも「在」に改める。

(5) 欄外注記に「理上疑脫其字」とある。『略疏』にも「類前事義。其理顯然」(同前卷、52c)とあるが、意味上に違ひがないので今は採らない。

(6) 欄外注記に「別疑誤當作明」とある。『略疏』にも「兼得觀慧分明分別法門」(同前)とあるが、「分別」と「分明」とでは意味が異なる。『文疏』のつづめた表現を『略疏』は敷衍したとも考えられるので、今は採らない。

【書き下し】

二に通別を明かすとは、還た前の三序を束ねて以て通別兩序と爲す。初めの「如是」の六義は是れ通序なり。現瑞と序述の二序を合して別序と爲す。言う所の通とは、衆經の初めは通じて六義を以て首めと爲し、通序と名づく。

次に別序とは、衆(經)の初め、現瑞は不同なり。序述は各異なる。表發するところに異なり有るが故に。故に別序と云うなり。

問う。何が故に此の通別兩序の不同有るや。

答う。具さには前の解の如し。一切衆經の名題必ず通別を具す。今、別名に因れば、則ち(別)序有り。別の言教有るなり。通名に因らば、則ち通序有り。通じて皆是れ佛の所説なり。乃至前の行の通別、理の通別を明かすに約す。此れに因るが故に、通別の兩序の義有ることを得。

問う。若し通別の両序、別・通の両名より出ざるを以てせば、名を立つること則ち、前は別、後は通なり。序と爲すは、何ぞ前の通、後の別なるを得んや。

答う。名を立つるの便は、応に前の別、後の通なるべし。序と爲すの便は応に前の通、後の別なるべし。^①

復た次に一途に義を明かさば、前の別、後の通なり。所以は何ん。現瑞、由藉の如きは是れ説經の前に在り。

「如是」の六義は乃ち是れ如来將に涅槃に入らんとして方に此の語を説く。故に知んぬ。後に在ることを。經の前の序は正しく現在の弟子の信心を發起せんが爲にして、經の後の序は未來の弟子をして信を生ぜしめんが爲なり。

問う。若し爾らば佛の在世の經に前に未だ序有らず、經と名づけざるや。^②

答う。別序の前に未だ六義を説かざると雖も、佛、説法の時、自ら具さに有るを以て經と名づくるを得るなり。

三に觀心に約して通別両序に対するを明かさば、心即ち通、觀即ち是れ別なり。此の心と觀に因りて一切佛法を成就す。故に觀心は即ち入道の初門、由藉なり。

問う。若し爾らば觀心是れ入道の筈たるを以て通別の両序の義と爲さは豈に顛倒ならざらんや。^③

答う。立名の便の故に觀心と言ふ。修行の便なれば心觀なり。此れ前の事の義なり。(其の)理、釋然たり。^④

問う。前は『玄義』の処々に觀心を明かす。已でに恐らくは入文復た爾るべからざるなり。將に經教を壞乱すべからざるや。

答う。經教を説くは本、人に教え、道に入らしむる爲なり。道を懐くの賢、触処に觀行す。^⑤豈に聖典を尋ね求めて觀行せざらんや。但だ巧みに説いて宜しきを得て、止だ文義を損ずる無きに非ず、兼ねて觀慧の分別を得。^⑥豈に壞乱の咎に致らんや。^⑦

維摩詰經文疏卷第一

- (1) 名を立つるの便は……別なるべし 經典は個々別々の名称があるので、經典名を強調する場合は前に別序、後に通序とする方が都合がよいが、經の序文という点からすると、前に通序、後に別序の方が都合がよい、という意。
- (2) 若し爾らば……名づけざるや 仏在世の時の説法は、まだ「如是我聞」以下、六義の通序が存在しないから、厳密に経といえないのではないかと、という問い。
- (3) 入道の筌 仏道に入る手段。「筌」は竹で編んだ魚を捕らえる漁具。転じて広く手段の意。「筌蹄」と熟して用いられることが多い。
- (4) 立名の便の故に……釈然たり 「觀」を別、「心」を通とするならば、「觀心」では別、通の順になるが、それは経名を強調するのに便利だからであり、修行という点からすると、逆の「心觀」、すなわち、通、別の順になる。この道理は先の場合と同様で明らかである、という意味。
- (5) 入文 經文に当たって解釈すること。入文解釈などと熟して用いられる。
- (6) 触処に「觸」は知覚認識と外界の対象との接触をいう。触処は、感覺知覚作用が働く場をいう。ここでは身に触れ、肌で感ずるところはどこでも、ほどの意。
- (7) 觀行 禪定の実践のこと。
- (8) 觀慧 禪定による智慧のこと。

【テキスト】 470c21-471a17

維摩羅詰經文疏卷第二(從如是訖菴羅樹園)

第五明入經文。今釋通別序者。即爲二意。一釋通序如是等六義。二釋別序。如現瑞。先釋通序六義者。六義通

爲衆經之序。復須爲兩義分別。一總釋。[471a]二別釋。一總釋如是我聞者。是佛教阿難等諸大弟子。說入佛法相。大智論云。佛將入涅槃。阿難親屬愛結未除。心沒憂海。阿泥樓駄語阿難言。汝是守護佛法人。若於未來事有疑者。及時諮決。何爲在憂海。如世凡人。阿難得念道力。悶心得醒。即以四事請問。一佛涅槃後。我等云何修道。二問誰當作師。三問惡口車匿云何共住。四問佛經初首作何等語。(佛)告阿難。若今現在。若去世後。依四念處修道。解脫戒經是汝大師。身業口業應如是行。惡口車匿。依梵法治。若其心輒伏、教那陀迦旃延經。即得入道。是我三大阿僧祇劫所集法寶藏。是初應作是說。如是我聞。一時佛在。某方某國土某處所樹林中。非獨我法初安如是語。過去未來現在諸佛經初首。亦安是語。知如是我聞六義。即是通序。一切衆經。悉安初首此之義。亦名遺囑序。如來遺言所囑。以此標經首也。亦名經前序。三世諸佛經前。皆須安此語也。

- (1) 欄外注記に「一下疑脫問字」とある。『略疏』にも「二問佛涅槃後云何修道」(『大正藏』卷三十八、567c)とあるが、「問」の一字がなくとも意は通じるので、今は採らない。
- (2) 欄外注記に「告上疑脫佛字」とある。『略疏』にも「佛告阿難若今現在」(同前)とあり、意味上からも必要なので、今「佛」を補う。
- (3) 欄外注記に「復疑誤當作伏字」とあり、『略疏』にも「若其心湮伏」(同前卷、568a)とある。『大智度論』に「若心濡伏者」(『大正藏』卷二十五、66c)とあるので、今、テキストの「復」を「伏」に改める。
- (4) 欄外注記に「是字疑誤當作也字」とある。『略疏』に「即得入道。我三僧祇所集法藏」(同前)とあり、「是」の字はない。意味上は『略疏』の方が通り易いが、今はテキスト通りとする。
- (5) 欄外注記に「下是疑當作之」とある。『略疏』では「所集法藏。初應作如是說」(同前)とあって「是」の字はない。今はテキスト通りとする。

(6) 欄外注記に「作下疑脱如字」とある。『略疏』では「所集法藏。初應作如是説」(同前)とあるが、今は意味上の相違はないので、テキスト通りとする。

(7) 欄外注記に「知上疑脱故字」とある。『略疏』では「故知六義即是通序」(同前)とある。しかし、今は「故」の字がなくとも意味は通じるので、テキスト通りとする。

【書き下し】

第五に經文に入るを明かす。今、通別の序を釋すとは、即ち二意と爲す。一には通序の「如是」等の六義を釋す。二には別序を釋す。現瑞の如し。先に通序の六義を釋すとは、六義は通じて衆經の序たり。復た須く兩義を爲して分別すべし。

一に総じて釋し、二に別して釋す。

一に総じて「如是我聞」を釋さば、是れ佛、阿難等の諸大弟子に教えて、佛法に入る相を説く。『大智論』に云く、「佛將に涅槃に入らんとするに、阿難は親屬の愛結未だ除かれず。心は憂海に没せり。阿泥樓駄、阿難に語つて言わく、『汝は是れ佛法を守護する人なり。若し未來事において疑い有れば、時に及んで諮つて決せん。何すれぞ憂海に在ること世の凡人の如くなるや』と。阿難、道力を念ずることを得て、悶心醒めることを得て、即ち四事を以て請問す。

一に佛涅槃の後、我等云何して道を修めん。二に問う。誰をか當に師と作すべきや。三に問う。惡口の車匿と云何が共に住せん。四に問う。佛經の初首に何等の語を作さんと。 (佛) 阿難に告げたまわく、『若しは今現在、若しは世を去つて後、四念處に依りて道を修せよ。『解脱戒經』は是れ汝の大師なり。身業口業にて應に是くの如く行ぜよ。惡口の車匿は梵法に依りて治せ。若し其の心輒伏せば、『那陀迦旃延經』を教うれば、即ち道に入

ることを得。是の我が三大阿僧祇劫に集むる所の法寶藏は、是の初めに應に是の説を作すべし。『如是我聞。一時佛在。某方某國土某處所樹林中』と。獨り我が法のみ、初めに「如是」の語を安ずるに非ず。過去・未來・現在の諸佛の經の初首、亦た是の語を安ずる」と。

知んぬ。「如是我聞」の六義は即ち是れ通序なるを。一切衆經悉く初首に此の義を安ず。亦た遺囑序と名づく。如來の遺言の囑する所、此れを以て經首と標するなり。亦た經の前序と名づく。三世の諸佛の經の前、皆、須く此の語を安ずるなり。

(1) 『大智論』に云く『大智度論』卷二に「如佛般涅槃時。於俱夷那竭國薩羅雙樹間。北首臥將入涅槃。爾時阿難親屬愛未除未離欲故。心沒憂海不能自出。爾時長老阿泥盧豆語阿難。汝守佛法藏人。不應如凡人自沒憂海。一切有爲法は無常相。汝莫愁憂。又佛手付汝法。汝今愁悶失所受事。汝當問佛。佛般涅槃後我曹云何行道。誰當作師。惡口車匿云何共住。佛經初作何等語。如是種種未來事應問佛。阿難問是事。悶心小醒得念道力。助於佛末後臥床邊。以此事問佛。佛告阿難。若今現前。若我過去後。自依止。法依止。不餘依止。云何比丘自依止。法依止不餘依止。於是比丘內觀身。當當一心智慧勤修精進。除世間貪憂。外身内外身觀亦如是。受心法念處亦復如是。是名比丘自依止。法依止。不餘依止。從今日解脫戒經即是大師。如解脫戒經說。身業口業應如是行。車匿比丘我涅槃後。如梵法治。若心濡伏者。應教刪陀迦旃延經。即可得道。復次我三阿僧祇劫所集法寶藏。是藏初應作是說。如是我聞一時佛在某方某國土某處樹林中。何以故。過去諸佛經初。皆稱是語。未來諸佛經初。亦稱是語。現在諸佛末後般涅槃時。亦教稱是語。今我般涅槃後。經初亦應稱如是我聞一時」とある(『大正藏』卷二十五、66b-c)。

(2) 親屬の愛結「愛結」は煩惱のこと。阿難は釈迦牟尼仏の従弟で、血縁者であるから、親族としての煩惱があることをいう。

- (3) 阿泥樓駄 サンスクリット Anuruddha、パーリ語 Anuruddha の音写。阿那律とも。天眼第一とされる仏の十大弟子の一人。
- (4) 道力 修行道の実践によって獲得される不思議な霊力のことをいうか。『中本起經』還至父國品では「佛勅目連。現汝道力。目連受教。飛升虛空。出沒七反。身出水火。從上來下。前禮佛足」(『大正藏』卷四、156c)とあり、道力の内容、空中を飛翔したり、身体から火や水を出したりすることのできる能力としている。
- (5) 悪口の車匿 サンスクリット Chandaka の音写。釈尊の太子時代の従僕とされ、釈尊が出家してカピラ城を出るとき、馭者として従ったとされるが、別な伝承ではクシャトリア出身ともいわれる。釈尊が成道後に初めて帰城した時に出家したとされる。その性、高慢で、他の比丘達と和合せず、しばしば悪口したので、六群比丘の一人に数えられ、悪口車匿と言われた。
- (6) 四念處 仏道修行における観法の一つ。三十七道品のうちの一种。身念處・受念處・心念處・法念處の四種。身は不淨なり、受は苦なり、心は無常なり、法は無我なりとそれぞれ觀察し、それによって觀慧を發する。
- (7) 『解脫戒經』 この經典、未詳。すべての戒本は解脫戒經と呼ばれるから、ここでも特定の經典を指すのではなく、仏在世中に制定された戒の總体をいうのであろう。なお、本学の末木康弘氏のご教示によると『大正藏』卷二十四に般若流支訳による同名の經典が収載されている。この經の内容は飲光部の伝持する戒本であり、根本説一切有部律戒本と類似する。しかし、この戒本と『大智度論』のいう經との関係は不明。
- (8) 梵法 梵壇 (brahmadāna) といひ、もとバラモンの退治法を取り入れたものという。僧団内で、この罰を受ける者に対し、沈黙を守って話し相手にならず孤立させる方法。
- (9) 『那陀迦旃延經』 詳細未檢。『籤録』は『雜阿含』卷十に、阿難が闍陀(車匿)のために離有無經を説き、それによつて闍陀は遠塵離苦したが、この經はもともと大迦旃延のために説いたので那陀迦旃延經というのだとする(卷一、十

五、オーウ。『雜阿含』卷十には「時尊者阿難語闍陀言。善哉闍陀。我意大喜。我慶仁者。能於梵行人前無所覆藏。破虛僞刺。闍陀。愚癡凡夫。所不能解。色無常。受想行識無常。一切諸行無常。一切法無我。涅槃寂滅。汝今堪受。勝妙法。汝今諦聽。當爲汝說。時闍陀作是念。我今歡喜得勝妙心。得踊悅心。我今堪能受勝妙法。爾時阿難語闍陀言。我親從佛聞。教摩訶迦旃延言。世人顛倒依於二邊。若有若無。世人取諸境界。心便計著。迦旃延。若不受不取不住不計於我。此苦生時生滅時滅。迦旃延。於此不疑不惑。不由於他。而能自知。是名正見。如來所說。所以者何。迦旃延。如實正觀。世間集者。則不生世間無見如實正觀。世間滅則不生世間有見。迦旃延。如來離於二邊。說於中道。所謂此有故彼有。此生故彼生。謂緣無明有行。乃至生老病死憂悲惱苦集。所謂此無故彼無。此滅故彼滅。謂無明滅則行滅。乃至生老病死憂悲惱苦滅。尊者阿難說是法時。闍陀比丘遠塵離垢。得法眼淨」とある（『大正藏』卷11、66c-67a）。

(10) 語を安ずる 語を置くの意。「安」は「置」と同義。

【テキスト】 471a17-471b8

問。何故經初安如是等語。惡口車匿教梵法治。比丘依波羅提木叉住。佛法無量。皆得入道。何故但令修四念處也。

答曰。經安如是等語者。爲斷疑勸信故。亦爲印定佛說非弟子及（九）^①十六種所說故。亦爲成行人深信故。亦爲破外人經初以阿漚二字標其教首故。阿漚者是謂吉相。邪僻之過事。如百論之所具破。爲如是等種種因緣。佛教之初安如是六義也。惡口車匿教梵法治者。[471b]車匿自恃王種。出家佛在世時。輕諸比丘不遵衆法。僧法事時。輕笑言。如似落葉旋風所吹聚在一處。何所平論。佛去世後猶自不改。佛令作梵壇擯。謂黜擯也。亦云梵壇法治者。梵天治罪法。別立一壇。其剋犯法者令入此壇。諸梵不得共語。若心調伏。爲說那陀迦旃延經者。令離有無。中道爲說即入初果也。一家明三藏教立非有非無門。異於三門意在此也。

(1) 欄外注記に「十上疑脱九字」とあり、『略疏』では「亦爲印定佛說非弟子及九十六種所說故」(『大正藏』卷三十八、508a)とある。今、意味上からも「九」を補う。

【書き下し】

問う。何が故ぞ經初に如是等の語を安ずるや。惡口の車匿は梵法もて治せしめ、比丘は波羅提木叉に依りて住す。佛法は無量なり。皆、道に入ることを得。何が故に但だ四念處のみを修せしむるや。

答て曰く、經の如是等の語を安ずるは、疑を斷じ、信を勸めんが爲の故なり。亦た佛説は弟子及び(九)十六種の所説に非ずと印定せんが爲の故なり。亦た行人の深信を成せんが爲の故なり。亦た外人の經初に阿漚の二字を以て其の教の首と標するを破さんが爲の故なり。阿漚とは、是れ吉相を謂う。邪僻の過事は『百論』の具さに破す所の如し。是くの如き等の種種の爲に佛教の初に如是の六義を安ずるなり。

惡口の車匿は梵法もて治せしめよとは、車匿は自ら王種を恃む。出家するも佛在世の時、諸の比丘を輕んじて衆法を遵せず。僧の法事の時、輕笑して言わく、「落葉、旋風の吹く所に聚り、一處に在るに似たるが如し。何ぞ平論する所ぞ」と。佛、世を去られて後も猶を自ら改めざれば、佛は梵壇を作り擯せしむ。黜擯と謂うなり。亦た、梵壇法もて治すと云うは、梵天、罪を治する法にして、別に一壇を立て、其の犯法者に剋して此の壇に入れしめ、諸梵は共に語るを得ず。若し心調伏せば、爲に『那陀迦旃延經』を説くとは、有無を離れ、中道もて爲に説いて即ち初果に入らしむるなり。一家に三藏教が非有非無の門を立て、三門と異なるを明かすは、意、此に在るなり。

- (1) 波羅提木叉 サンスクリット *prātimokṣa* の音写。戒律規定の総体、具足戒のこと。別解脱戒ともいう。
- (2) (九) 十六種の所説九十六術の外道説。外道の説の総称。六師外道はそれぞれ十五人の弟子を率いていたので、全部で九十六人となることから。『別譯雜阿含經』には「如是我聞。一時佛在王舍城耆闍崛山中。爾時王舍城有九十六種外道。各各祠祀。設有檀越。」(『大正藏』卷一、390b)とある。
- (3) 印定 印可決定のこと。間違いないと認め、決定すること。
- (4) 亦た外人の……の二字 外人は外教の人の意。阿漚は *oṃ* の音写で、インドのヴェーダに由来する呪文。バラモン教からヒンドゥー教へ、さらには密教へと取り入れられた。吉蔵は『百論疏』の中で、阿漚の二字をヴェーダや經典の初めに置くようになった次のような逸話を紹介している。「外云。昔有梵王。在世説七十二字以教世間。名佉樓書。世間之敬情漸薄。梵王貧恪心起收取吞之。唯阿漚兩字從口兩邊墮地。世人責之以爲字王。故取漚字置四韋陀首。以阿字置廣主經初。四韋陀者外道十八大經」(『大正藏』卷四十二、251a)。
- (5) 邪僻の過事 よこしまで偏っている過ち(ご)との意。
- (6) 百論の具さに破す所 提婆造・鳩摩羅什譯・婆藪開士釋『百論』上下巻のうち、上巻で外道を破折している。たとえば 破神品第二では、サーンキヤのプルシャ批判、二十五諦説批判が展開されている(『大正藏』卷三十、170c以下)。
- (7) 王種 四姓の内のクシャトリア階級のこと。
- (8) 平論 『籤録』によれば、「平」は「評」と通ずるとする(巻一、十五才)。評論の意。
- (9) 梵壇 *brahmadāṇḍa* の音写。前段パラグラフの注(8) 梵法を参照。
- (10) 三門 (こゝ)では有無の四門のうち、有門、無門、亦有亦無門のことを指すか。

【テキスト】 471b8-471c3

教諸比丘依波羅提木叉住者。波羅提木叉。此翻保解脫。亦云報解脫。亦云處處解脫也。問曰。毗尼明時食時衣等。多非正義。那得云保解脫。

答曰。大智論云。佛說毗尼爲令佛法久住。不應求實。求實即生邪見也。今時僧衆。不以戒律在心者。恐佛法不得久住也。

如所問言。佛道入道教門無量。何得但令依念處修道也。

答曰。若離四念處。布施但得大富。持戒得生人天。頭陀淨戒淨行坐得定。隨禪生梵天。多聞說法但是世智辯聰。後生還得聰明果報也。若與念處相應。即能破四倒。以無瞋心修諸善法。無非道也。

問曰。聲聞經說。必須依四念處修道。摩訶衍教。觀無生入道。豈須四念處有所得觀耶。

答曰。大乘有無生四念處。何處別有摩訶衍無生正觀入道也。但佛教雖復無量。不出半滿。聲聞經說生滅四念處。即是半字。摩訶衍說無生無量無作三種念處。即是滿字。半字即是四枯。滿字即是四榮。如此枯榮雙樹間。得見[471c]佛性。住大涅槃。名諸佛法界。當知出念處外更有何大小乘入道之勝法也。故佛遺囑令諸弟子依四念處修道也。

(1) 欄外注記に「瞋疑誤當作顛」とあるが、『略疏』では「若修念處能破四倒」(『大正藏』卷三十八、508a)とあるのみで、これに該当する文はない。意味上から考えて「瞋」は「顛」の誤りである可能性が高いが、ここではテキスト通りとする。

【書を下し】

諸の比丘をして波羅提木叉に依りて住せしむとは、波羅提木叉、此に保解脫と翻じ、亦た報解脫と云う。亦た處處解脫と云うなり。

問うて曰く、毗尼は時食・時衣等を明かし、多く正義に非ず。那ぞ保解脫と云うを得んや。

答えて曰く、『大智度論』に云く、「佛、毗尼を説いて爲に佛法をして久しく住せしめ、應に實を求めず。實を求むれば即ち邪見を生ずるなり」と。今時の僧衆、戒律を以て心に在らざれば、恐らく佛法久しく住するを得ざるなり。

問う所の言の如く佛道の入道の教門は無量なり。何ぞ但だ念處に依りてのみ修道せしむるを得んや。

答えて曰く、若し四念處を離るれば、布施は但だ大富のみ得。持戒は人天に生まるることを得。頭陀・淨戒・淨行坐は定を得、禪に隨て梵天に生ず。多聞説法は但だ是れ世智辯聰なり。後生に還た聰明の果報を得るなり。

若し念處と相應せば、即ち能く四倒を破し、曠心無きを以て諸の善法を修さば、道に非ざる無きなり。

問うて曰く、聲聞の經説は必ず四念處に依りて道を修することを須う。摩訶衍の教は無生を觀じて道に入る。あに四念處の有所得の觀を須いんや。

答えて曰く、大乘に無生の四念處有り。何れの處に別に摩訶衍の無生正觀もて道に入ること有らんや。但だ佛教は復た無量なりと雖も、半滿を出でず。聲聞の經は生滅の四念處を説く。即ち是れ半字なり。摩訶衍は無生・無量・無作の三種の念處を説く。即ち是れ滿字なり。半字は即ち是れ四枯、滿字は即ち是れ四榮なり。此の如く枯榮雙樹の間に、佛性を見、大涅槃に住することを得。諸佛の法界と名づく。當に知るべし。念處を出でて外に更に何れの大小乗の道に入るの勝法有らんやと。故に佛は遺囑して諸の弟子をして四念處に依りて修道せしむるなり。

- (1) 保解脱 『籤録』では、日本には「保得解脱」とあるといい、保解脱の語は経論には見えないが「保」は「報」のことだとする(巻一、十五ウ)。
- (2) 報解脱 報得解脱の「得」の字を略したもの。果報として自然に得る解脱のこと。『成実論』に「問曰。外道神仙無報得解脱戒。是人能得戒律儀不」(『大正蔵』卷三十二、296a)などがある。
- (3) 處處解脱 別々解脱、別解脱ともいう。一つ一つの戒が各の悪を別々に解脱するからこのようにいう。
- (4) 毗尼 vinayaの音写。律のこと。教団の規律、規定。
- (5) 『大智論』に云く、卷第一に「亦是毘尼中結戒法。是世界中實。非第一實法相。吾我法相實不可得故。亦爲衆人瞋呵故。亦欲護佛法使久存定弟子禮法故。諸三界世尊結諸戒。是中不應求有何實。有何名字等」(『大正蔵』卷二十五、66a)とある。
- (6) 禪に隨て梵天に生ず 禪定修習の果報によって梵天界に生ずることだが、『維摩經』問疾品では「雖行禪定解脱三昧而不隨禪生。是菩薩行」(『大正蔵』卷十四、545c)という。
- (7) 四倒 無常を常、苦を樂、不淨を淨、無我を我ありと見る、四種の顛倒した見解。四顛倒のこと。
- (8) 半滿 半字、滿字のこと。サンスクリットで、母音記号の摩多と子音記号の体文とが合した字を滿字といい、母音記号の摩多のみを半字という。半字は不完全なもの、滿字は完全なものとして、教判に用いる。天台では半字を小乘、滿字を大乘とする。
- (9) 半字は…：四榮なり 「四枯」「四榮」は、仏の入涅槃の時、東西南北にそれぞれ沙羅双樹があつて、それぞれの双樹が一本は枯れ、一本は勢いが盛んだつたので、四枯、四榮という。天台は半字の小乗教が世間の四顛倒を否定して四不顛倒を実現したことを四枯とし、滿字の大乘教が四不顛倒をさらに否定して涅槃の四徳としての常樂我淨を実現することを四榮とする。『法華玄義』にも「二乗爲自減度修此五禪。成四枯念處。不名堪忍地。菩薩爲化衆生深觀念處。慈悲

誓願荷負衆生。成四榮念處。是摩訶衍名堪忍地也」(『大正藏』卷三十二、720a)なふとある。

【テキスト】 471c3-11

第二別釋通序如是等六義。舊解多用五義。今用六義。六義者第一如是。第二我聞。第三一時。第四佛住。第五方所。第六同聞。如是者勸信之端也。我聞者是親承音也。^①一時者感教之時也。佛者的出化主也。方所者聞經之處也。同聞者證非已謬傳也。此六義相次者。正爲變成佛去世後。見聞之徒。息疑增信。自利利人。功成道就也。^②如是謂勸信之端者。如是意在勸信。而六義皆爲勸信。如是居初故。云勸信之端也。

(1) 欄外注記に「音下疑脱旨字」とあり、『略疏』では「二我聞者親承音旨」(『大正藏』卷三十八、568b)とある。しかし、「旨」の字がなくとも意味は通じるので、今は採らない。

(2) 「就」の字について、『略疏』では「自利利人功成道熟」(同前)とあり、「熟」とある。しかし「就」には、「成就」と熟すように、(物事が)まとまる、成功するという意味もあるので、今はテキスト通りとする。

【書き下し】

第二に通序の如是等の六義を別釋す。舊解は多く五義を用う。^①今は六義を用う。六義とは、第一に如是。第二に我聞。第三に一時。第四に佛住。第五に方所。第六に同聞なり。如是とは勸信の端なり。我聞とはこれ親しく音を承くるなり。一時とは、教を感ずるの時なり。佛とは、化主を出すに約するなり。方所とは、經を聞くの處なり。同聞とは、己の謬傳に非ざるを證するなり。此の六義相い次ぐは、正しく成佛して世を去つて後の見聞の徒を變成し、疑を息^②そめ、信を増し、自利し、人を利し、功成じて道就^③らんが爲なり。如是は勸信の端と謂うは、

如是の意は信を勧むるに在り。しかして六義は皆信を勧むる爲なり。如是は初めに居るが故に勸信の端と云うなり。

(1) 五義 第四の「佛住」と、第五の「方所」を合して「佛住某所」として五義で解釈する。

citations from Jizang's works, these citations on Zhiyi's dictation part turned out to be trivial, in terms of his doctrinal thought. Therefore it can be safely said that Zhiyi's commentary is as valuable as it thought to be.

The author decided to make an annotated Japanese-translation of the *Weimojing wenshu*, which has not yet been made in Japan. The author used 『維摩經文疏』 (Sūtra Number 338, vol. 18 of *Shinsan Dainihon Zokuzōkyō* 新纂大日本統藏經 as original. It comprises 90 volumes, including 2 catalogues, which has been published from 1975 to 1980 by Kokusho Kankōkai 国書刊行会, mainly edited by Dr. Kosho Kawamura 河村孝照. And this newly edited Chinese Buddhist canon features great easy-of-use, which is succeeded from *Taishō shinshū daizōkyō* 大正新脩大藏經. And now one has access to Electric-text version of *Shinsan Dainihon Zokuzōkyō* via web site of CBETA (Taiwan-based Chinese Buddhist Electronic Text Association 中華電子佛典協會.)

This instalment contains only a few paragraphs, i.e. from X.18.469b4 to X.18.471c11. I intend to continue publication of the annotated translation in the future issues.

*Professor,
International College
for Postgraduate Buddhist Studies*

Summary

An annotated Japanese-translation of Zhiyi's *Weimojing wenshu* 『維摩經文疏』 (3)

FUJII Kyoko

The *Weimojing wenshu* 『維摩經文疏』 is a Zhiyi's commentary on the text of Kumārajīva's translation of the *Vimalakīrti-nirdeśa-sūtra* (*Weimojie suoshuo jing* 維摩詰所說經).

Zhiyi 智顛 (538–597) composed the commentary with twenty-five fascicles in his latest years at the request of Prince Guang of Jin. After Zhiyi died, his disciple Guanding 灌頂 (561–632), the fourth patriarch of the Tiantai school, made up the commentary to twenty-eight fascicles. This Zhiyi's commentary seemed to have been one of the most important works to research his latest doctrinal thought by the reason that the work had been dictated by himself. In spite of that, the commentary had not been studied so often because of its great amount. Since Zhanran 湛然 (711–782) had distilled the Zhiyi's *Weimojing wenshu*, and made the *Weimo jing lue shou* 『維摩經略疏』 with 10 fascicles, his concise commentary was generally available for study on the *Weimojie suoshuo jing* in Tiantai school. In the above circumstances, at the present, although Zhanran's concise commentary is put in *Taishō shinshū daizōkyō* 『大正新脩大藏經』, Zhiyi's is not in spite of its value.

Recently some new studies on Zhiyi's commentary have been made in overall aspects, that is, from philological study to doctrinal thoughts one. Among them, Dr. Shunei Hirai's study is notable in pointing that not only in the Guanding's additional part of the Zhiyi's commentary but also in the Zhiyi's own dictation part, Guanding's additions from Jizang's 吉藏 (549–623) works, were to be discovered in the existing text. Scrutinizing the